



巻 頭 言

アイジーエスのジー (IGSのG) ジオテキからジオシンへ

IGS理事 赤木 俊 允

1994年9月のシンガポール会議中に開催されたIGS総会において、学会名IGSのGをジオテキスタイルからジオシンセティックスへと変更する理事会案が、全会員による郵便投票結果に基づき、正式に決定された。郵便投票は、IGSのGをジオテキスタイルのままに変えないか、あるいはジオシンセティックスへ変えるのか、を問うもので、変更案に賛成が617票、反対が29票、投票率は余り高いとは云えなかったが、投票した会員の圧倒的多数が1983年来の学会名を変更すべきとする結果となった。

IGSは、“International Geosynthetics Society”つまり、「国際ジオシンセティックス学会」となったわけである。我が日本支部も1995年1月の総会において正式に学会の名称変更を追認し、これに伴う諸規約の変更、対外的な通知、会員への周知、へと動き出すこととなった。本誌も「ジオシンセティックス技術情報」へと、本年7月号(Vol. 11, No. 2)から名称変更を実施している。

ジオテキスタイルという語はジオメンブレンと共に、1977年頃ジルー(J-P Giroud)が初めて提唱したものとされている。衆知のごとくこれは、大地を表すジオ(geo)と織物を指すテキスタイル(textile)との合成語であるが、狭義には、織布を意味するものであり、不織布ぐらいまでならそれほどの抵抗感はなかったものと思われる。しかし、ネット、グリッド、コンポジット、それにジオメンブレンに至るまでジオテキに含めてしまおうという動きとなつては、特に英語を母国語とする人々の大多数には、我慢の限界を超える言葉の濫用と感じられるようになったに違いない。

学会名中のジオテキスタイルは、実体を表さない誤った名称という議論が、1980年代後半には既に理事会内で何度も行われていたようである。1990年のハーグ会議におけるIGS総会においてこれが表面化し、その後の理事会において、またIGS NEWS誌上において、繰り返しホットな議論が交わされてきた。

ジオシンセティックスという新語は、ジオテキスタイルという語の登場後間もなく、フルエ(J. E. Fluet Jr.)が創り出したものとされている。世界中で次第に多用されるようになり(ジオシ

ンセティックスを含む名称の国内学会や国際会議は相当数に登っている)、IGSが対象とする多様な製品をよく包含するものとの認識が主流となっていった。シンセティック (synthetic) は、狭義には化学的合成物、つまり人工的な製品であり、自然材料を排除する意味を持つことになりかねないが、広義にはいくつかの要素を組み合わせ総合して出来たもの、を意味するようである。蛇足ながら、ジオシンセティックは単数の普通名詞あるいは形容詞、最後に「ス(s)」が付けば複数名詞となる。

デニス (R. Denis, IGS NEWS, Vol. 6, No. 3) によれば、synthetic は synthesis と同じ意味を持つもので、元々は reunion を意味する語、とのことである。彼はジオシンセティックを広義に解釈して、土中に埋設され土と共に統合的に使われるものとし、IGSが対象とする材料はすべてジオシンセティックで包含される、と主張する。つまり、地盤内で自然には存在し得ない材料は、人工、自然を問わず、すべてジオシンセティックと呼んでよいとする。しかし、これに対しては拡張解釈が過ぎる、との異論も出されている。

ジオテキスタイルが、IGSの学会名を表す語としては不適切であるという点については、余り際だった異論は無かったように思われる。特にジオメンブレン関係の人々にとっては、以前からジオテキのみではジオメンを疎外するものとの不満がくすぶっていた。新しい名称がジオシンセティックでよいか、という点で議論が長引いたということになる。特にシンセティックという言葉が、ジュート、ココヤシ皮 (coir)、竹など、インド、中国、東南アジアで手広く利用され製造販売されている自然の繊維材料によるネット、メッシュ、バーチカルドレーン等のジオテキ製品を除外してしまうのではないかと懸念があった (S. D. Ramaswamy, IGS NEWS, Vol. 7, No. 2)。また我が国をも含め、ジオテキが外来語である非英語圏においては、これだけ普及している表現を今更何故、といった反応が一般的で、改名への積極性を欠いたと云うこともできよう。

新学会名にも「ジオテキスタイル、ジオメンブレン、関連する諸製品、およびこれらに関係ある諸技術の科学的・工学的開発に専念する (IGS)」という具合に、サブタイトルが付されている。ジルーが指摘するように (J-P Giroud, IGS NEWS, Vol. 9, No. 1)、ここにはジオテキという語が生き残っているので、自然繊維を除外することにはならない。そしてIGSという略語もそのまま変わらないわけであるから、学会名の継続性は維持できるとの意見に、大勢は傾いて行ったように思われる。

筆者はかつて、「IGSのS」と題する駄文を草し本誌の巻頭を汚したことがある (Vol. 9, No. 1)。当時既に「IGSのG」は問題になっており、早晩会員諸氏に対しGについて報告しなければならないことを感じていた。大変遅まきながら、今回その責の一端を果たすべく下手な解説を試みたわけであるが、残念ながら外国語についての細かい論議は筆者のよくするところではない。「IGSのI」についての理解度が問われる問題でもあることを痛感している次第である。